

2013年11月9日 県民集会報告

集会アピール

福島原発事故から2年8ヶ月たっても、高濃度の放射性物をふくむ汚染水が大量に海へ流出しており、収束どころか、いまだに危機的状況にあります。福島県では原発事故のために今も県内外へ14万人が避難を余儀なくされ、ふるさとから離れた地で先が見えない生活を強いられています。

政府は「新規制基準」をテコに、原発再稼働や新増設、原発輸出を公言し、従来の推進路線を継続しようとしています。しかし「新規制基準」は、小手先の対策をならべたものにすぎません。福島原発事故の原因が究明されていません。使用済み核燃料の問題も解決のめどがたつていません。再稼働も輸出することまたちに中止し、汚染水対策に全力をつくすことを求めます。

志賀原発1号機の真下にある「S-1」断層は活断層の疑いありと、原子力規制委員会が現地調査対象としています。その原発の北側約9kmの「富来川南岸断層」が活断層であるということが、住民運動と専門家の調査によって明らかにされました。

過酷事故が起こったら原発以北の能登の住民は避難できません。

志賀原発では重大な事故がくり返されており、過去にも臨界事故隠しをするなど、安全よりも利益追求を優先する北陸電力の姿勢が厳しく批判されています。

9月15日に大飯原発が停止し、再び稼働中の原発はゼロとなりました。原発がなくても、国民生活も日本経済も破綻していません。原発マネーに頼らずに、再生可能エネルギーの普及を通じて新たな事業と雇用をつくり出してこそ、地域の持続可能な発展の道も大きく広がっていきます。

私たちは北陸電力が計画を発表してから21年間原発建設を許しませんでした。運転開始後20年間様々な不安で過ごされてきた住民の皆さんとを一つに、本日、原発立地の志賀町で県民集会を開きました。私たちは、原発立地県の県民として子どもたちの未来のためにも原発の再稼働を許さず、すべての原発の廃炉を求めます。

「原発ゼロ」を求める行動は、全国各地に大きく広がっています。全国の運動と連帯し、共同をさらに広げていきましょう。



会場ロビーには原発から10kmの地元で、友禅染めをしている呼びかけ人の志田弘子さんの「子どものいのちこそきつときつと」の思いを込めた友禅染絵パネルが参加者を迎えました。



**北陸電力・志賀原発の地元で
会場いっぱい600人が集う!**

開会のあいさつ



集会に参加された10人の呼びかけ人の紹介があり、24人の呼びかけ人を代表して石川県宗平協理事長河崎俊栄さん(七尾市小島町・日蓮宗本延寺住職)が「原発と人類は共存できない。政府、原発の地元を動かし、原発のない幸せな世界を残そう」と開会の挨拶をされました。

呼びかけ人

浅妻南海江(プロジェクトゲン代表)、海部公子(九谷焼画工)、飯森和彦(弁護士)、五十嵐正博(神戸大学名誉教授)、井上英夫(金沢大学名誉教授)、江守道子(歯科医師)、大森定嗣(石川県原水協)、岡井直道(かなざわ演劇人協会)、小野栄子(福島県出身)、かつおきんや(児童文学者)、金森俊朗(いしかわ県民教育文化センター)、河崎俊栄(石川県宗教者平和協議会)、佐藤清(原発問題住民運動石川県連絡センター)、志田弘子(友禅染)、白崎良明(医師)、菅野昭夫(弁護士)、田口昭典(金沢キリスト教会牧師)、鳥毛美範(弁護士)、直江俊一(金沢大学名誉教授)、西田直巳(医師)、西本多美子(被爆者)、橋本哲哉(金沢大学名誉教授)、松浦健伸(医師)、吉田均(原発の危険から子どもを守る北陸医師の会)
(50音順)

報 告

ふくしまから



原発事故から2年8か月、11.2ふくしま大集会を7000名で成功させ石川にかけつけたふくしま復興共同センター代表委員の斉藤富春さんは、収束どころか汚染水問題など危機的状況、除染も賠償も進んでいない。と政府と東電の理不尽な対応を報告。「私たちは幸せになる権利はないのか」と浪江町長の言葉を紹介し、「オール福島、のたかいが県議会、県知事、国を動かしている。「収束宣言」の撤回、全責任をもった汚染水対策、県内10基の廃炉、原発ゼロの政治決断を国に求め、県民過半数の百万人署名運動を起こし「オール福島の更なる広がりをつくり、全国のみなさんと連帯し、安心して暮らせる日本を実現する決意です」と報告。

国会から



7月の参院選で3回目の当選を果たした井上哲士議員は、10月2日志賀原発周辺の断層を視察し「設置時の北電のずさんさが大問題となっているが、その姿勢は現在も変わっていない。科学的知見で総点検すべきで、廃炉しかない」と指摘しました。この臨時国会で安倍暴走と対決し、汚染水ブロック発言を正し、再稼働・輸出には何の道理もなく、直ちに中止し、汚染水対策に全力をあげよ、と積極的提案で政治を動かしている国会論戦を紹介し、会場を沸かせました。原発維持は事故当時多数だったが、今ではどの世論調査でも7～8割がNO!即原発ゼロと自然エネルギーの開発にこそ未来があると発言。確信をもって共にがんばろう、とエールを送りました。

活断層調査から



原発問題住民運動石川県連絡センター児玉一八事務局長が、今年10月に福浦灯台下の海岸(志賀原発の北2km)を調査した。この広い波食台には、多くの断層が走っている。この断層群や志賀原発敷地西方海岸の断層群は、原発敷地内の活断層と走行が類似しており共通した応力場で形成された。北電は海岸の「線状地形」が浸食でできたと言っているが調査の結果、断層の特徴である鏡肌と条線が見つかった。二段の海食ノッチが見つかったことも重要で、志賀原発周辺から北の海岸地域全体が地震の度に隆起してきたことを示す。北電には、活断層問題を調査する能力がなく、原発を運転する事業者としての自覚もない。志賀原発は、福島原発に続いて真っ先に廃炉にすべき原発だ、と報告。

リレートーク



リレートークでは、事故が起きれば逃げ場のない輪島から邑田真美さんの訴え、お隣の富山、福井からも参加があり、志賀原発から30km内の水見市や50km圏内に四市がすっぽり入る富山県から、毎週金曜の行動隊と共に参加した高橋渡さんの連帯の挨拶、石川からも69回(2/3現在80回)を数えた「どいね原発」金曜行動の若者たちの元気なトークで盛り上がりました。

集会アピール



県民へのアピールは北電が原発計画を発表してから20年間、建設を許さなかった地元志賀町在住の青年、中谷志信さんが提案し、万場の拍手で採択されました。

閉会のあいさつ

長曾事務局長は、600人が参加し会場からたくさんのカンパが寄せられ集会が成功したことに感謝を表明。これを力に草の根から学習を強め、県民1割・10万人署名を3月めざして集め志賀原発再稼働許さず廃炉を求めて大きく運動をひろげようと呼びかけました。